

## 使用体験レポート

# DVD版『美術新報』を 使ってみた！



## 目次

DVD版『美術新報』に驚く  
新しい発見、楽しい飛躍  
彙報記事検索の妙味

高村光太郎記念会  
早稲田大学教授  
筑波大学教授

北川太一  
中島国彦  
五十殿利治



八木書店

## DVD版『美術新報』に驚く

高村光太郎記念会 北川太一

夢の様な時代が来たと思う。日々慌ただしい世情のなかで、新しくDVDになった『美術新報』を目の前にして、これだけはそう思う。

昭和三十一年に亡くなった高村光太郎の最初の全集を作った時には、複写機すら手許になかった。人々の力を借りて資料の所在を訪ね求め、ひとつひとつ筆写して原稿を作った。繰り返し繰り返し繰り返しての照合や修正、いま思えば気の遠くなるような時間と労力の連続だった。ついこの間まで一本一本活字を拾っていた印刷の工程を思う。僅かな修正さえどんな面倒な作業を必要としたか。

だがいまさらこの小さなDVDの、巨大な容量や、機能について驚いていてもしかたがない。かんじんなのはそこに充填された内容の質と、利用のために設定されたその仕組みだ。

先頃、太平洋画会の明治期の変遷をたどる機会があつて、丹念にこの雑誌の誌面に目をさらし、美術界の公器としての幅広い中正な目配りや、内容の信頼性、重要度によって重複、改定も厭わぬ論評、報道の誠実さに心を打たれた。いま

までも家蔵の大部な原誌を、ことあるごとにくたび繰り返ったことか。そのたびにいつも貴重ないとぐちの発見があつて、労は報いられる。ほとんど無限といつてもいいその情報量は美術に関心を持つ誰もの、かけがえのない宝だ。

しかし近代の美術に関する資料の整備は、文学に比べて遅れていたように思う。『美術新報』でさえ、広告まで含む善本を集め、散逸しやすい付録を補って整備した努力は想像を超える。最初の復刻版を完成するまでの編者や書店の払った苦心に感謝しないわけにはいかない。ことに別巻として索引を含む総目録が添えられたことはその利用価値を格段に高めた。しかし書冊の形をとる索引には限度がある。記事の内容には及ばず、彙報記事は対象から除かれる。

しかし今度は格段に違う。まず画像で収録され、たちどころに思うがままのページの記事や図版を呼び出し得る機能は、扱いにくく大部の原誌を積み上げ、一ページずつめくり、必要な記事を探索する重労働から利用者を解放する。仕事は狭い机上で容易に足りる。プリントアウトは電話をかけながらの片手間でも済む。研究者にとつて、これは強力自在な孫悟空の如意棒に近い。

しかも索引機構の充実はどうだ。先の復刻版からその企画に深く関与し、今度の索引項目編纂にあたった中島理壽さんのお仕事を早くから知っている。利用者はDVDの機能を信頼するのではない。そこにどんな信頼すべき内容が構成されているかを判断する。美術に関する雑誌はもちろん、展覧会

のカタログ、片々たるパンフレットにいたるまで、およそ資料のありそうな場所に丹念に足を運び、所在をたしかめ、記録し、整理して、資料によって日本の近代美術史研究の基礎を固めたのは、中島さんの大きな仕事だ。このDVD版『美術新報』への信頼は編者への信頼に外ならない。美術資料を見通す広く深い視野、その理解、把握の確かさ、事の軽重をみわける調和感覚。縁の下の力もちの果てしない努力がこの仕事全体を支える。ことに彙報、時報、消息類の索引の殆ど完璧と云っていい充実には驚く。

「高村光太郎」を引けば、たちまち六十二の項目の一覧表が画面に現れる。表題のみならず文中の光太郎まで拾い上げられ、見慣れているその名前さえ新たな相貌をもってたちあらわれる。例えば大正二年六月三日発行の第十二巻第八号三十二頁三段の彙報で拾われる朱泥会の記事細目は「北川蝠亭／与謝野夫妻／森鷗外／角田浩々歌客／宇田川文海／淡島



寒月／高村光太郎」を指示し、その篆刻頒布会

によってさらに展開する交遊図を暗示する。三世蝠亭は北川英美子の女性名で『明星』に短歌

をおくった、大阪に住む、かつての琅玕洞の陶印作者だ。パリから帰って光太郎が企てた日本で最初の画廊琅玕洞の名は、今ではよく知られている。しかし一年後に画家大槻武雄に委譲され、そこで岸田劉生の最初の個展が催され、田村とし子の「あねさま」や長沼智恵子の沢山の「团扇絵」が陳列された、その後の琅玕洞の消息は美術史の表面にはほとんど取り上げられない。検索はただちに大正八年に及ぶ四十五件の項目を表示して、その探求の方向を与える。

一途に思う者は誰でも、ほんの小さな一語のいとぐちからさえ、おもいがけない展望が開ける可能性を知っている。研究者は整理され響き合うこの膨大な資料群に立ち向かって、新たなかぎりない情熱をかきたてられるに違いない。

もとよりどんなに万能な編輯者でも、あらゆる研究者の要望にこたえる、あらゆる語句を抜き出し、あらゆる索引項目を用意することは出来ない。このDVD版には必要に応じて書き込むことの出来るメモ欄が用意される。一緒に成長するこれは頼りがいある研究の友だ。自分だけの個性的な『美術新報』を育てるのも楽しみだ。

こうなれば欲ばりな利用者の、望蜀の夢をつけ加えることも許されるだろうか。大正二年一〇月に始まって、同じ時期を覆い、より濃やかに美術界の情報を補う『美術週報』や『美術旬報』や『美術月報』の、索引を同じくするDVD化も同じ編者の手によっていつか実現しないものだろうか。それはもっと大きな未来への、実り多い企てになるはずなのだが。

## 新しい発見、楽しい飛躍

早稲田大学教授 中島 国彦

日本の近代文学の勉強を始めてから、時折文芸雑誌を継続的に繰っていく経験をするところがある。有名な作品を実際の誌面で確かめるのもうれしいが、それ以上に雑誌の片隅に記されている消息や記事の一つ一つ確認していくことも、貴重な体験であった。文学と美術とのつながりに注意しながら研究を進めるようになってから、『ホトトギス』『明星』『白樺』などを、一冊一冊開いていくことがどんなに大切かがわかった。口絵や図版にも、眼が離せない。どの一冊からも、時代の息吹きを読み取ることが出来る。

しばらくして、『美術新報』も視野に入ってきた。明治三十年代半ばから大正にかけて、なにか美術とのかかわりで調べたいことがあると、図書館の書庫でこの雑誌を開けることが多くなった。明治から大正は『美術新報』、大正から昭和は『中央美術』——まず、そこそころがけた。しかし、わたくしの大学の図書館の『美術新報』には、かなりの欠号があった。ちょうど調べたいところが無かったりすると、ひどくがっかりする。書籍の復刻版が出た時の嬉しさは、だから

ひとしおだった。美術作品の図版がないかと探す時、復刻版の『総目録』のお世話になることが度重なった。『美術新報』復刻版がなければ書けなかった論文は、いくつもある。

そして、今度はDVD版である。その便利さは、実際に使った者でなければわからないだろう。たとえば、永井荷風の小品『浮世絵の夢』（明治四四・六『三田文学』）を読むとす。大正期に高まる荷風の浮世絵熱の、最初のあらわれである。はしがきに、「明治四十四年四月中帝室博物館内に陳列されたる名画を見て書いたものである」とあるので、メインメニューの「巻号を選択して見る」で、その年月近辺を一号一号探してみよう。「自動移動」の機能は、一回のクリックですぐ自動的に次々とページが画面に出るので、便利だ。程なく、十巻七号（明治四四・五）の展覧会記事や「洋画家の浮世絵観」（久米桂一郎、藤島武二、長原孝太郎）も読める。この展覧会が、「徳川時代婦人風俗に関する絵画及服飾器具類」の特別展覧会であったことが、主要出品作と一緒にわかる。荷風の見方と洋画家の見方とを比較することも、出来るわけだ。荷風はその一篇「歌麿の女」で、歌麿の描く女の情感を見事に言葉にしている。『美術新報』のその号には、『男女』という歌麿の図版も見られるのである。拡大機能を使って、その図版を大きくしてみる。全ページ画面ではややぼけたように見えるものでも、拡大するとはっきりと細部まで観察することが出来る。

ここで視点を変えて、「歌麿」と入れて検索してみたい。



八十二の項目のリストが、たちどころに年代順に画面に表示される。面白いことに、そのうち明治時代は、わずか十二件なのである。この号の前は八卷十三号（明治四二・九）で、次は十一卷六号（明治四五・四）である。ということとは、一年に一篇も記事が無いわけであり、明治末での歌麿の扱われ方が理解出来よう。それだけ、荷風の言及が際立つわけだ。『美術新報』誌上で歌麿が多く言及されるのは、大正四年の橋口五葉の文章からである。そういえば、竹久夢二がこの展覧会に何度か出かけて、「歌麿と長信がよし」と記していたことが、日記に見えていた。「竹久夢二」の項目は、十二件。明治期

は、わずか二件しかない。改めて、その位置が理解されよう。

この博物館の特別展の目玉の一つは、原六郎蔵の狩野長信『花下遊宴図屏風』だった。雑誌面から、それが理解出来る。しかし、『浮世絵の夢』を読むと、荷風は、それには見向きもしなかったようだ。この屏風作品を検索すれば、十卷十二号

（明治四四・一〇）に図版二面があることが、すぐさまわかる。項目はそれだけだから、あまり出品されなかったものなのであろうか。荷風の小品から始まったわたくしの楽しい飛躍は、まだまだ続く。それを可能にしてくれるのが、おびただしい数の、このDVDのデータなのである。

明治から大正にかけての多くの人名が、きちんと整備されているのは、本当に圧巻である。かつて、筑摩書房版『明治文学全集』の別巻『総索引』を手作業で編集する一員となったことがあったが、やはり人名の整理には一苦労があった。このDVDは、それを見事にクリアーしている。講談社版『日本近代文学大事典』が出た時、担当した項目の一つに「山中古洞」があった。『挿絵節用』は手に入れたが、没年がわからない。今でもわからないままである。なつかしいこの画家の名を検索すると、四十件の項目がある。活躍の時期と『美術新報』の刊行時期が重なるからであるが、そこから彼の参加していた烏合会の動きも、手に取るように見える。昭和まで生きた山中古洞だが、もし『美術新報』がそのころまで出していたのなら、追悼記事も誌面に掲げられていたはずで、すぐさま引けただろうに、と思わずにはいられない。

# 彙報記事検索の妙味

筑波大学教授 五十殿利治

今日、インターネットやコンピュータを利用しない美術史の研究は考えられなくなっているようにみえる。美術館収蔵作品の画像から研究文献のデータベースまで、インターネットの利用範囲はますます広がっている。なるほど作品調査をはじめ美術史学の方法論の基本は大きく揺るがないにせよ、たとえば、この学問を支えてきたといえるスライドはいまやデジタルカメラの普及を前に風前の灯火という感が拭えない。美術史学会でも、またたく間に、液晶プロジェクトによる発表が優勢になっている。

このたびのDVD版『美術新報』はまさにこうした時代の趨勢に即したものだといえる。

実際に使用してみたところ、利用者にとつて、書籍版『美術新報』と比較して格段に優れた利便性があると感じた。同一の情報を入手するのであれば、DVD版の速度はまさに快適である。書籍版は判型が大きく、一度にいくつもの冊子を机に拡げることがなかなか難しい。ところが、DVD版ならば、画面上で異なる号のページをいくつものウィンドウにた

やすく展開することができる。しかも、求めている記事のプリントアウトをクリックひとつで手にすることが可能だ。

さらに、目当ての記事と同時に、表紙、目次、奥付を同時に印刷できることは、コピーをとるたびに、書誌情報を余白に書き込み、ときにそれを書き写し間違ふといった、誰も経験するような、だが笑えない苦勞から研究者を解放してくれるものである。製本された雑誌を複写機の傍らにうずたかく積み上げて、複写したあげくに、ふと気がつくとう典不明の、しかし興味深い内容のコピーがまぎれ込んでいるといった憂き目にあった人であれば、その便利さはそれこそ骨身にしみることだろう。しっかりと製本された雑誌はしばしば巻号数や発行年月を読みとることさえ一苦勞である。

情報の拡張性という点で、検索データがエクセルのファイルとして出力できるだけでなく、個々にカスタマイズできるのは、ありがたい。インターネットのURLをそのまま貼り付けることができるし、画像もリンクを貼ることが可能になっている。かつて稀覯書のコレクターを訪ねたとき、研究というものはノリとハサミではできないと諄々と諭されたことを思い出す。実際、書物に限らないが、実物を熟覧してはじめて理解できる広がりや奥行きは貴重だと思ふ。それでも、情報を切り取り、貼り付けることで、新しい世界が見えることはできないだろう。

今回のDVD版でとりわけ歓迎したいのは、逐号目録や図

版目録に加えて、彙報記事が検索対象に加えられたことである。主な美術雑誌には必ず消息欄があり、人物の動静、個展やグループ展の開催期日や場所、受賞等が雑然と記載されているのであるが、しかし、美術界の生きた様相を浮彫にしている情報が詰め込まれているともいえる。ところが、この彙報欄を系統的に分析することは個人の手にはあまる作業である。人名ひとつをとっても、そこに登場するのは、巨匠から画学生まで、あまりにも雑多である。個人で、限られた数の美術家の名前を忍耐強くいちいちチェックすることなど、一年間なら一年間と期間を限定でもしないかぎり、初めからできない相談だろう。



ために三会堂を検索してみた。一九二二(大正二)年に

は白馬会展が開かれ、白樺派や草土社の会場ともなった明治末から大正初期の重要な展覧会場である。検索結果では三二件の関連記事が見つかった。当時の三会堂は一九〇四(明治三七)年に新築された木造建築であり、関東大震災で焼失した。『美術新報』で最初に

とりあげられたのは、一九〇八(明治四二)年末、美術同志倶楽部が春季皇霊祭の当日「先輩追弔会」を開催し、西洋音楽を演奏して、先輩の遺作と肖像を列べる予定という記事であり、最後は一九一九(大正八)年の草土社展の開催案内である。最初の記事はこれまで知らなかった。赤坂溜池一―二番地の三会堂のすぐそば、同三番地には白馬会溜池研究所があったが、それはもともと合田清の生巧館の位置した場所である。つまり、洋画の先達に捧げる「先輩追弔会」には相応しい場所のひとつであった。また、岸田劉生や木村莊八が通ったのも同じ白馬会研究所であり、その行き帰りに立ち寄った三会堂が草土社の会場となることになった。こうした時間的空間的な連関を浮かびあがらせることが彙報記事検索の妙味といえる。

関連情報の収集という点では文学研究がはるか先を行っている。読売新聞や時事新報の文芸欄を地道に整理したのは文学研究者たちである。DVD版『美術新報』によって、美術史も遅ればせとはいいながら、美術活動をより広範な社会的な、そして学際的なフレームのなかで位置づけるツールを得たといえる。

## DVD版『美術新報』の検索性

■琅玕洞（全45件の抜粋） \*北川太一氏推薦文参照  
「玕」はJIS外字のため検索データでは「○カン○」と表記されます。

巻号	発行年月	頁分類	分類+総題	個別題	細目
9	8明治 43/06	彙報	時報 展覧会	正宗氏作品展覧会	(18頁3段) 正宗得三郎/琅○カン○洞
9	10明治 43/08	彙報	時報 展覧会	柳敬助氏作画展覧会	(16頁2段) 琅○カン○洞
9	12明治 43/10	彙報	時報 展覧会	斎藤与里氏作品展覧会	(16頁3段) 琅○カン○洞
10	5明治 44/03	彙報	時報 展覧会	浜田葆光氏作画展覧会	(32頁1段) 琅○カン○洞
10	5明治 44/03	彙報	時報 消息	正宗得三郎氏油画小品画会	(33頁2段) 琅○カン○洞
10	6明治 44/04	彙報	時報 消息	南薫造氏	(32頁3段) 琅○カン○洞
10	7明治 44/05	彙報	時報 彙報	琅○カン○洞の閉店	(30頁2段)
10	8明治 44/06	彙報	時報 展覧会	山脇信徳氏作画展覧会	(31頁2段) 琅○カン○洞
10	8明治 44/06	彙報	時報 展覧会	琅○カン○洞の展覧会	(31頁3段) 高村光太郎/大槻二雄/夏向新柄半襟陳列会
10	10明治 44/08	図版		琅○カン○洞の扇子団扇展覧会と洞主大槻氏	(28頁)

■歌麿（全82件の抜粋） \*中島国彦氏推薦文参照

巻号	発行年月日	頁分類	分類+総題	個別題	細目
1	3明治 35/04	彙報	時報	太平洋画会大会	(7頁1段) 正木東京美術学校長/明治美術会/歌麿/上野精養軒
5	16明治 39/11	彙報	時報 ときのご系	米国の日本錦絵	(6頁3段) ハーヴァード大学/松本某/北斎/広重/国芳/国貞/歌麿/古年/秀峰/桜野/勅使河原佐太郎
5	21明治 40/02	彙報	時報 博覧会彙報	浮世絵の相場	(7頁4段) 菱川師宣/懐月堂/鳥居清長/奥村政信/鈴木春信/喜多川歌麿/葛飾北斎/東洲斎写楽/岩佐又兵衛/山東京伝/春草/重政

■三会堂（全32件の抜粋） \*五十殿利治氏推薦文参照

巻号	発行年月日	頁分類	分類+総題	個別題	細目
6	22明治 41/03	彙報	時報	先輩追弔会	(6頁3段) 美術同志倶楽部/三会堂/松本楼/キヨソーネ/ワクマン/フォンタネージ/川上冬崖/国沢新九郎/高橋由一/五姓田芳柳/原田直次郎/大野幸彦/山本芳翠/浅井忠/渡辺金秋
6	23明治 41/04	彙報	時報	洋風美術家追弔会	(6頁3段) 美術同志倶楽部/福地復一/小山正太郎/中村不折/五姓田芳柳/岡精一/三会堂
7	1明治 41/05	彙報	時報	白馬会溜池研究所	(6頁4段) 和田三造/橋本邦助/村上天流/三会堂
7	15明治 41/10	彙報	時報	白馬会記念会	(7頁3段) 白馬会溜池研究所/三会堂
7	23明治 42/02	彙報	時報 彙報	展覧会会場の決定	(7頁1段) 旧博覧会第二号館/白馬会/三会堂/天眞社/勤工場三号館/日本画会
7	24明治 42/03	彙報	時報 諸画会	諸展覧会開催期日	(7頁3段) 天眞社絵画展覧会/旧博覧会第三号館/二葉会絵相撲大会/生池院/日本画会展覧会/白馬会展覧会/三会堂/東京写真研究会品評会
8	1明治 42/03	彙報	時報 諸画会	東京写真研究会	(7頁3段) 三会堂

■高橋源吉（全9件の抜粋） \*高橋由一長男。現存作品も少なく謎の画家とされる。

巻号	発行年月日	頁分類	分類+総題	個別題	細目
2	19明治 36/12	彙報	時報	洋画家の史談会	(6頁3段) 工部美術学校/小山正太郎/松岡寿/本多錦吉郎/長沼守敬/松井昇/渡部鞆太郎/高橋源吉/浅井忠/若狭屋
4	5明治 38/06	本文		洋画の先覚 高橋由一氏伝(一)	(3頁)
13	2大正 02/12	図版		高橋由一氏肖像	(14頁)

■秦テラヲ（全4件） \*明治未から昭和戦前記まで活躍した日本画家。

巻号	発行年月日	頁分類	分類+総題	個別題	細目
15	6大正 05/04	彙報	芸界消息	秦テラヲ氏	(32頁2段) 上田敏/深田康算/松本亦太郎
15	12大正 05/10	彙報	諸会報	秦テラヲ氏	(32頁2段) カフェ・オリエント
16	6大正 06/04	彙報	時報 消息	秦テラヲ	(48頁2段) 青島社
2	5大正 08/06	彙報	時報 芸苑日誌〔四月、五月、六月〕	五月一日	(24頁1段) 秦テラヲ個人展覧会/秦文社/吾楽/美術工芸品展覧会/農商務省商品陳列館